

米軍基地や戦跡巡り、 民意形成の過程を考える

日本と韓国の大学生が、交流を通じて互いの国を知る「ジャーナリストを目指す日韓学生フォーラム」が2月15～18日、沖繩で開かれ、日韓両国の学生や実行委員ら計42人が参加した。2017年11月にソウルで第1回、昨年8月の原爆の日に合わせて広島で第2回を実施した企画の第3回。現役の新聞記者やOBが、新聞労連や日本ジャーナリスト会議（JCJ）とともに取り組んでいる試みだ。

今回は地元紙の『沖繩タイムス』と『琉球新報』の協力を得て、米軍基地や太平洋戦争の戦跡などをバスツアーで巡った。おりしも辺野古への新基地建設の賛否を問う住民投票の1週間前。普天間、嘉手納などの米軍基地を見学し、辺野古では反対運動の現場で座り込みをしている人たちに話を聞いた。

県南部では、「平和の礎」や「平和祈念資料館」「ひめゆりの塔」「魂魄の塔」などの戦跡を訪問。ポラントニアで戦没者の遺骨発掘を続けている具志堅隆松さんに案内され、糸満市の山林で発掘されたばかりの日本兵とみられる遺骨を見ることもできた。

今も戦没者の遺骨が日常的に見つかる現状を通して地上戦の悲惨さを実感し、沖繩の民意がどのように形作られたのかを考えてもらうのが狙いだ。

戦争の最前線に立たされた沖繩には、朝鮮半島から連れてこられた多くの軍夫や「慰安婦」がいたはずだが、その実態は今も分かっていない。06年によ

うやく建立された慰霊碑を訪れた韓国人学生たちは、どのような思いを抱いただろうか。

私は1972年の日本復帰直後の沖繩で小学生時代を過ごした。昨年3月に82歳で亡くなった父、新崎盛暉が、74年に自らのルーツを持つ沖繩に大学教員として、家族を連れて渡ったためだ。父は沖繩戦後史の研究者や反基地運動の伴走者として生涯を沖繩で過ごし、今も母や弟家族が那覇市で暮らしている。今回の企画を引き受けた背景には、通信社記者として約30年を過ごした私の生き方に大きな影響を与えた沖繩の存在が、ジャーナリストを目指す学生たちにも多くの示唆を与えるだろうとの思いがあった。

学生たちは男女別のコテージで寝泊まりし、酒を呑みながら夜中まで日韓の政治情勢や歴史について熱く議論を交わしていた。就職活動の時期と重なったため、韓国人学生の参加が4人にとどまったのは残念だったが、刺激的な4日間となったのは間違いないだろう。

4月から記者職などで、『朝日』『日経』『北海道』『福島民友』の各新聞社、『NHK』『TBS』で働いている7人のほか、参加した韓国人学生が体験や感想を報告する。

新崎盛吾・元新聞労連委員長
クレジットの無い写真は学生が撮影

辺野古



遠くに辺野古の埋め立て作業が見える。(撮影/長谷川綾)

「戦没新聞人の碑」の前で解説する新崎盛吾さん。
(前列、撮影/長谷川綾)



フォーラムで訪れた主な場所

嘉手納基地



「道の駅かでな」の屋上から見た嘉手納基地。多くの軍用機が駐機している。

嘉数高台



嘉数高台の展望台で、『沖縄タイムス』の与儀武秀記者から説明を受ける学生たち。(撮影／長谷川綾)

平和の礎



沖縄戦の戦没者約24万人の名前を石碑に刻む「平和の礎」。

魂魄の塔



終戦直後に放置されていた遺骨が集められ、葬られた「魂魄の塔」。

遺骨発掘



糸満市の遺骨収集現場で、日本兵とみられる遺骨を前に言葉が失う学生たち。(撮影／長谷川綾)

辺野古



米軍基地「キャンプ・シュワブ」のゲート前で座り込む人々。

辺野古



辺野古の新基地建設現場を望む学生たち。(撮影／長谷川綾)



生活の中で起きていた戦争

沖縄戦跡



沖縄戦で犠牲になった女学生たちが眠る「ひめゆりの塔」。

「な」

ぜ私が生き残ったのか」
沖縄戦を経験した住民

の証言を以前に書籍で読んだことがある。海外の激戦地で生き残った日本兵と同じ感想に、当時は違和感があったが、今回初めて沖縄の地を自分の足で踏んで、その意味を理解できた気がした。沖縄戦の戦跡はいずれも住宅地のそばにあった。戦争が庶民の生活の中で起きていたこと、自分や家族、友人がいつ死んでもおかしくない状況だったことに、改めて気付かされたのだ。

付近の斜面には、日本兵が内部にこもって近づく米兵を銃撃したとみられるコンクリート製のトーチカが残されている。艦砲射撃の直撃を受けたため一部は崩れ落ちていたが、今も原形をとどめており、内部に入ることも可能だ。5〜6人で入ってみたが、光がほとんど遮られ、どんよりとした空気が漂う空間には、なんとも言えない閉塞感を感じた。

16日には「ひめゆりの塔」魂魄の塔「平和の礎」平和祈念資料館」など、沖縄本島南部の戦跡を回った。那覇市首里にあった日本軍司令部の陥落後、多くの住民が日本兵と混在する形で洞窟などに

い銃痕が残る壁の前では、近所のお年寄りがゲートボールの練習をしていた。

1945年4月、米軍は沖縄本島中部の海岸線から上陸。日本軍の主力部隊は、嘉数高台付近で南進する米軍を迎え撃ち、約50日にわたる一進一退の地上戦が繰り返された。

追い詰められ、4人に1人が命を落とした沖縄戦の中でも、最大の犠牲者が出た地域だ。

ひめゆりの塔に眠るのは、私より年下の女学生たち。日本兵の部隊に従軍して負傷者の手当てをする日々は、どれほどつらく恐ろしかったことだろう。

魂魄の塔には、終戦直後に放置されていた遺骨が集められ、身元確認もできないまま約3万5000人が葬られたとされる。その犠牲者の数に圧倒され、塔の前で手を合わせて目を閉じると、思わず身震いがした。

沖縄戦の戦没者約24万人の名前を石碑に刻む平和の礎は、青々とした海を望む平和祈念公園の敷地内に並んでいた。国籍のほか、軍人、民間人を区別せずに扱うことで世界の恒久平和を願い、終戦50年に当たる95年に建設された。

公園内に併設された平和祈念資料館の一室には、生き残った住民の生々しい証言集が並んでいた。「米兵に壕の存在が気付かれるからと、泣き止まない赤ん坊を殺した」敵の捕虜になる前に自分で死ねと言われ、手榴弾を支給された。人間が人間として扱われず、命を大切にする当たり前の感覚が消し去られた異常な時代だった。

もし、そこにいるのが自分だったらと想像してみた。私は死にたくないし、誰かを殺したくもない。今の平和な世の中では普通のことだが、普通ではない時代があった。二度と繰り返してはならない、教訓を伝えていかなければならないと実感した。

一方で、実際に戦争を知る人々が激減する中で、戦争がもたらす本当の怖さを伝えていく難しさも感じる。修学旅行で戦跡を回るだけでは、教科書上の出来事として理解することしかできない。実感を伴わない平和学習は、ただ退屈なだけで終わってしまうだろう。二度と戦争を繰り返さないために、戦時中の出来事を自分の身に起きることとして想像する意識が大切だと思う。H・A、横浜国立大

青

い海と白い砂浜が広がり、南国情緒あふれる海岸線を

の注目を集める名護市辺野古の新しい基地建設現場がある。

北上すると、無機質な有刺鉄線に囲まれた米軍基地「キャンプ・シユワブ」が姿を見せた。自然豊かな沖縄県北部の「山原」に、全国

路肩に止めたバスを降り、建設に反対する人々が座り込みを続ける基地ゲート前の「テント村」へ向かった。ブルーシートと角材、

で作られた小屋が、国道を挟んで基地と対峙する。2月16日も約30人が座り込みをしていた。「不屈1686日」という立て看板の文字が、長い闘争を物語る。

何故人々を突き動かすのか。座

り込んでいた方々に尋ねてみた。目の不自由な渡嘉敷綾秀さん(68歳)は4年以上前から、週に2日は白杖を手に那覇市からバスで訪れる。

「米軍による事件、事故などの基

地被害をずっと見てきた。1日も早く普通の生活ができる沖縄にしたい。戦争で多くの住民が命を落とした歴史も忘れてはいけない」と訴えた。

テント村の前でマイクを握り、集会の進行役を務めていた大城悟さん(55歳)は、基地反対運動を長年主導してきた沖縄平和運動センターの事務局長。「沖縄の未来をかけた闘いだ。民意に反した政府の横暴には、抗わなければならない」と力を込める。

「日米安全保障という国の問題なのに、沖縄だけが7割近くの米軍基地を負担している。沖縄に基地を押しつける正当性はない」。座り込みという意思表示で民主主義を守ろうとする思いが伝わってきた。



ゲート前の警備員と、抗議する人に取材する学生たち(後方)。

ふと、国道の反対側にあるゲート前に立っていた制服姿の3人の男性警備員が目に入った。米軍施設の敷地を示す足元の黄色い境界線の向こう側で、基地内に入入りするダンプカーなどの誘導を続けている。ヘルメットの下の日焼けした顔は、硬い表情だった。警備員も「島人」なのだろうか、

嘉手納基地 機密の壁に阻まれる取材

普 天間や辺野古の問題がたびたび報道される一方で、最近の注目度が下がっているように感じるのが、極東最大級の米空軍施設、嘉手納基地(約2000ヘクタール)だ。

沖縄防衛局によると、F15戦闘機など100機以上が常駐。2017年度の航空機離着陸は5万8066回で、普天間基地の4倍を

超える。

嘉手納基地の見学に訪れたのは2月16日。隣接する「道の駅かな」の屋上に上がると、4000メートル級の滑走路が視界いっぱいに広がった。基地は嘉手納町全体の8割以上を占める。

土曜日だったためか、発着する米軍機はほとんどなかった。だが、沖縄県の17年度の調査によると、

辺野古 沖縄分断を象徴する風景

自分の仕事をどのように感じているのか。素朴な疑問を抱いた私は、1人に近づいて「お疲れさまです」と声を掛けてみた。警備員は驚いた様子だったが、気まずそうに小さく会釈をして、視線を合わせず直立不動を続けた。



ゲート前で座り込む人たちにインタビューする学生たち。(撮影/長谷川綾)

「琉球を返せ」と書かれたプラカードを持った女性が「この人達は洗脳されているから」と口を挟んだ。警備員に何度か話し掛けてみたが、口を開くことはなかった。

バスへ戻る途中、埋め立ての土砂が投入された海が金網越しに見えた。何が地域社会や人々を分断しているのだろう。基地への容認、反対では割り切れない沖縄の現実を目の当たりにし、今まで問題を直視してこなかった自分を恥じた。埋め立ての賛否を問う2月24日の県民投票では、反対が総得票数の7割を超え、沖縄の民意は再び明確に示された。私は同じ日本に住む一人として、この結果を無視できない。

D・K、北海道教育大

人が健康に暮らすための環境基準を超える騒音が、1日当たり60回以上発生した地域もあった。普天間基地は辺野古への移設で撤去されるかもしれないが、嘉手納では負担が減る見通しはない。

しかし「近隣自治体との関係は、他の地域と比べてそれほど悪いわけではない」。昨年4月から嘉手納町と読谷村の取材を担当する『沖縄タイムス』篠原知恵記者(31歳)が、意外な一面を教えてください。

反基地一色でない背景には、土地が強制的に接収された普天間と異なり、旧日本軍の基地を戦後に米軍が引き継いだ事情がある。嘉手納基地側もツイッターで住民との交流を発信したり、学生をインターンとして受け入れたり、融和に努める姿勢が見られる。

基地と対立するよりも、「言うべきことを言って、住民のスタンスを理解してもらおうという形に変わりつつある」と篠原さん。半ば諦めの気持ちから、少しでも現状

恨之碑 被害者想像する視点に欠ける



「恨の碑」の前で、学生たちに建立の経緯を説明する安里英子さん。

を改善したいとの住民のささやかな願いに胸が痛んだ。

基地への取材は苦勞が絶えない。定例の記者会見などはなく、取材はメールが原則。返信に数日かかることもあり、電話を掛けてもほとんど応じないという。

篠原さんが、地元の知り合いから入手した有事即応訓練の動画を、見せてくれた。真夜中の住宅街で、

空襲警報のようなサイレンが鳴り響いていた。この動画のように、何が起きているか分からず不安に感じた住民による情報提供も多い。

取材は、沖縄防衛局や米軍に問い合わせをする地道な確認作業から始まる。軍事機密の壁に阻まれることが多く、基地で何が起きているのか正確に知ることは難し

い。 ニュースは文字通り、「新しいこと」を伝えるため、日常的な騒音被害を報道することは難しいのかもしれない。しかし、そのような状況を知らうとする努力を記者が怠れば、被害に苦しむ住民の声を表に出ることはない。これから記者になる者として、心に留めておきたい。

田崎隆、中央大

戦

時中の沖縄には、労働者(軍夫)や「慰安婦」として1

万人以上の朝鮮半島出身者が連れてこられ、数千人が命を落としたとされる。韓国人の学生とともに2月15日、朝鮮半島出身者を追悼するため、沖縄県読谷村に建立された「恨之碑」を訪れた。

その名称について、日本人への恨みの意味で「恨」という言葉が使われたと思いついていたが、ハングルでは「深い悲しみ」という

ニュアンスが強いことを教えてもらった。日韓関係悪化の背景には、互いの文化や歴史への認識不足が影響しているのではないかと加害者と被害者の立場を乗り越えて、若者世代が歩み寄る意義を強く意識させられた。

恨之碑には、日本兵に連行される若者と引き離される母親を描いた、彫刻家の金城実氏制作の銅製レリーフが埋め込まれている。同胞の遺骨収集のため戦後に沖縄を訪れた元軍夫の男性2人の想いを受け、同じレリーフを使った碑が、韓国の慶尚北道に1999年、読谷村には2006年に建立された。沖縄の碑を管理するNPO法人「沖縄恨之碑の会」共同代表の安里英子さん(70歳)は「日本政府は朝鮮半島出身被害者の本格的な調査をしたことがなく、実態は今も分かっていない。とても

過去を清算できているとは言えない」と指摘する。

安里さんの説明を受けた後、韓国人学生に「恨」という言葉の意味について尋ねてみた。日本では決着済みとの見方が強い戦時中の補償問題について、韓国人がいまだに被害を主張する背景には、日本人への恨みがあるのではないかと推測したからだ。ところが、東京に留学している韓国人学生の姜明錫さん(29歳)は「誰かへの恨みではなく、悲しみが繰り返されることへの虚しさ」だと説明した上で「祖父の世代が殺されているので、根に持つ感情もないとはいえない」と付け加えた。

私は知らず知らずのうちに、自分が韓国人全体をイメージで決め付けていたことに気付かされた。彼らがなぜ深い悲しみを抱えなければならぬのか、韓国と日本の



「道の駅かでな」の屋上で、学生たちに嘉手納基地の現状を説明する『沖縄タイムス』の篠原知恵記者(右)。

歴史をしつかり理解し、一人ひとりと正面から向き合うことの必要性を感じた。日本政府は、1965年の日韓基本条約で戦時中の補償問題は政治決着しているとの姿勢を崩さない。加害者として、被害者の立場を想像する視点に欠けている点に問題があるのではないかと。民間団体の調査によると、戦時中の沖縄には140カ所以上の「慰安所」があったとされる。1月に東京で開かれた事前勉強会で、75年に「慰安婦」として名乗り出て、91年に亡くなるまで沖縄で暮らし続けた女性、裴奉奇さんのドキュメンタリー映画『沖縄のハルモニ——証言・従軍慰安婦』を見た。裴さんが、過酷な当時の日常を淡々と証言する様子に驚いた。日本軍への恨み言よりも、自分が沖縄に連れてこられ、故郷に帰れないことを嘆いていた。「恨」とは、

そのような感情なのではないかと
想像した。

一方で、映画が制作された78年
こそ、客観的な証言の記録が可能

だったとも感じた。戦後の早い時
期に事実に基づいて日韓の主張を
折り合わせていければ、現在のよう

な補償問題を巡る日韓関係の悪化
は避けられたのかもしれない。
小松玲葉 横浜国立大

野

葉畑裏手の林に100メー
トルほど分け入った先に、

沖縄戦で死んだ日本兵とみられる

遺骨が転がっていた。大腿骨、下

あごなど、茶色く変色しているが、

一目で人骨だと分かった。付近の

岩場には、葉莢や缶詰が散らば

り、近くの地下壕に潜伏していた

様子がかがえる。

「太くて健康的な骨ですから、20
代の若者でしょう」

ボランティアで遺骨収集を続け
る民間団体「ガマフヤー」代表の

具志堅隆松さん（65歳）が、遺骨

を手に説明を始めた。ガマフヤー

とは沖縄の方言で、洞窟を掘る人

という意味だ。

現場は沖縄県糸満市。日本兵と

住民が混在する中で激しい掃討戦

が行なわれ、多くの命が失われた

場所だ。「ひめゆりの塔」の近くで

具志堅さんと待ち合わせ、2月17

日に現場を案内してもらった。

遺骨の日本兵は、どんな夢を持

っていたのか。もし生き延びてい

たら、どのような未来が待ってい

たのか。同じ時代に生まれていれ

ば、私も同じ目に遭ったかもしれ

ない。そう考えると、戦争の怖さ、

平和の尊さを改めて感じた。

具志堅さんは医療機器修理の仕

事をしながら、週末を利用して遺

骨収集を続けている。2012年

には活動をまとめた『ぼくが遺骨

を掘る人「ガマフヤー」になった

わけ』（合同出版）を出版した。

具志堅さんが本格的に遺骨収集

を始めたのは30年以上前。米軍用

地の返還により1990年代初め

に始まった那覇新都心の土地開発

「ガマフヤー」茶色く変色した遺骨が転がる



日本兵とみられる遺骨を見せる
具志堅隆松さん。

で、戦没者の遺骨を粗末に扱う行政
の姿勢に不信感を強めたためだ。

現在は商業の中心としてにぎわ

う那覇新都心は、日米両軍で数千

人の犠牲者を出した激戦地のシユ

ガーローフ（安里五二高地）とし

て知られる。土砂の掘削で、多く

の遺骨とともに軍靴や軍服のボタ

ン、つぶれた水筒などが見つかつ

たという。しかし開発を急ぐ事情

もあったのか、本格的な収集作業

や遺骨の身元確認は行なわれなかつ

た。具志堅さんは「今も悔しさ

や後ろめたさを抱え続けている」
と、収集活動が十分にできなかった
当時の悔しさを振り返った。

日本兵とみられる遺骨を発見し

た場合、まずは警察に連絡し、事件

性がないことを確認してもらった

上で、収集・保管して行政に引き渡

す。今回私たちが目にした遺骨は

昨年末に見つかったが、具志堅さ

んは現場をそのまま保存していた。

「すぐに供養するべきではないの

か」。学生から出た質問に、具志

堅さんは静かに答えた。

「遺骨は74年間、誰にも見つけて
もらえず、ここに放置されていた。
遺骨が見つかった場所を見て、皆

さんのような若者に戦争を実感し

てほしいのです」。温和な話し方

の語気が少し強まった気がした。

高瀬智基、法政大卒

『琉球新報』と『沖縄タイムス』 県民の側に立つ報道が当たり前

『琉球新報』と『沖縄タイム
ス』。沖縄で購読率の高

い地元2紙は、米軍普天飛行場

代替地としての辺野古新基地建設

にいずれも反対の論調を掲げてい

る。作家の百田尚樹氏は2015

年6月、自民党の勉強会で「沖縄

の二つの新聞はつぶさなといけ

ない」と発言。理由として、基地

問題をめぐる報道姿勢が「偏向」

していることを指摘した。その報

道姿勢はどこから来ているのか。

両紙の記者が強調したのは、特定
のイデオロギーに基づく反対では
なく、県民の側に立った報道をす
るという地元紙として当たり前の
役割だった。

「百田さんのおかげで、県外から

の購読申し込みが増えました」。

ジョークで会場の笑いを誘ったのは、フォーラム初日の2月15日に訪れた琉球新報社の編集局次長(当時)松永勝利さん(53歳)。基地問題をめぐる自社の論調について「県民が求めているニュースがなければ読んでもらえない。基地に反対する世論は強く、地元紙としても報道姿勢を明確にすることが期待されている」と説明した。

『琉球新報』は、安倍晋三首相が昨年2月の衆議院予算委員会、辺野古への基地建設の理由を「本土の理解が得られない」と説明したと、一面トップで報じた。「沖縄に対する差別を象徴する発言だが、全国紙はどこも報じなかった。問題意識がなければニュース価値は判断できない」と、松永さんは指摘する。

特別な計らいで、翌日の朝刊の

内容を検討する編集会議の様子も見学させてもらった。編集会議は限られた人しか参加できないというイメージだったが、『琉球新報』の場合、記者やデスクが働いているフロアのオープンスペースで行なわれていた。松永さんも現場の記者だった時は、自分の記事の扱いが悪くならないよう、近くに立って圧力をかけたという。

最終日の18日に訪れた沖縄タイムス社では、県政キャップの福元大輔さん(41歳)が、地元紙と全国紙の報道の違いについて教えてくれた。

「沖縄で何か事件や事故が起こると、全国紙が真っ先に指摘するのは、政治的にどういう影響があるかということ。『最悪のタイムイング』などと報道するが、タイムイングの問題なのか。本土では基地問

題は政治の話だが、沖縄では命と暮らしの話。そこが大きな違いだ。地元紙記者の気概が伝わってきた。

2月24日に投開票された辺野古埋め立ての是非をめぐる県民投票で「反対」が「賛成」を大きく上回ったことを受け、『朝日新聞』は翌日の社説でこう書いた。

「政府は今度こそ、県民の意見に真摯に耳を傾けねばならない」

国会で過半数を占める自民党中心の政権が進める政策である以上、埋め立てにも一定の理があり、県民投票の結果だけが全てではないという意識が垣間見える。ただ、選挙の結果を尊重する一方で、少数派の意見も可能な限り政策に反映させるのが、本来の民主主義のあり方だろう。

同じ全国紙でも、『毎日新聞』は



「ただちに埋め立てをやめ、沖縄県と真摯に解決策を話し合うべきだ」と、埋め立ての即時中止に踏み込んだ。論点を絞った県民投票で意思が明確に示された以上、埋め立てを中止した上で容認派の意見に耳を傾けるべきではないのか。私は4月から記者として働き始めた。地方紙に学び、全国紙の役割を常に考えながら、真に市民の側に立った報道を目指したい。

F・K、北海道大

写真上／『琉球新報』の編集会議を見せてもらう。
写真下／福元大輔記者の案内で『沖縄タイムス』社内を見学。(撮影／長谷川綾)

4

月の衆議院沖縄3区補欠選挙で、自民党の島尻安伊子(しましりあいこ)元沖縄北方担当相を破り当選した屋良朝博氏(56歳)は2月18日、学生らを前に「基地問題解決には、ジャーナリズムの限界を感じた」と出馬の動機を語っていた。

屋良氏はフイリピン国立大学を卒業後、『沖縄タイムス』に入社。社会部長、論説委員を歴任し、海兵隊が沖縄に駐留する必然性がな

いことを一貫して説いてきた。2012年に退社してからは、フリーランスで活動。『誤解だらけの沖縄・米軍基地』(旬報社)などの著書がある。

昨年9月に知事に転身した玉城デニー氏の後任として、新基地建設問題で揺れる辺野古を抱える沖縄3区に立候補。基地建設反対を明確に訴え、基地容認の島尻氏との一騎打ちを制した。

基地問題、直接行動に



学生に講演する屋良朝博さん。

屋良氏によると、基地問題にこだわるようになったきっかけは、1995年に起きた少女暴行事件。沖縄全土で反基地運動が空前の盛り上がりを見せたことで、基地撤

退の可能性を追求し始めた。米務省の文書などを通して、沖縄への基地集中の背景に本土の反基地闘争の激化があり、当時は日本の施政下でなかった沖縄に基地を押し付ける迷惑施設の不可視化政策があったことを明らかにした。中国などを仮想敵国とした軍事的脅威論や地理的要因も「後付けにすぎない」と喝破した。

埋め立て工事が進む辺野古の新

韓国人として考えたこと 他人事ではなく我々の問題になった時、 問題は解決できる



「魂魄の塔」の前に飾られている折り鶴。

基地建設を止めるための政策については「ワシントンで国防総省の関係者と面会する」との考えを表明。「沖繩に基地を押し付けたいのは、日本の政治的な事情。沖繩の状況を米国に直接伝えて外交交渉のテーブルに乗せたい」との見通しを示した。

辺野古を巡っては、埋め立ての

賛否を問う県民投票も「反対」が7割以上を占めたが、日本政府は強硬姿勢を崩さない。「国会議員も民意で選ばれた人たち。その国会議員がどうして沖繩の民意を尊重しないのか」。政府の対応を聞かれた時には、温和な表情に怒りにじみ出していた。いくら報しても政治が動かない現状に業を煮や

衆院補欠選挙に当選・屋良朝博氏

し、直接行動に打って出るしかないと考えたのだろうか。
屋良氏の「ジャーナリズムの限界」という言葉は、新聞業界に就職した私にとっては「悪魔のささやき」のように聞こえた。目の前に広がる厳しい現実を前に、諦めや妥協を呼び起こしかねない。

一方で「ジャーナリストには、

たった一人で世の中を動かす力がある。政治家は一人で世の中を変えられない」。そんな先輩記者の言葉が、弱気になりそうに私の背筋を伸ばしてくれる。ジャーナリズムの可能性と限界の間で揺れ動きながら、一歩でも前に進みたい。

坪倉淳子、中央大

ない。

韓国と日本は、複雑に絡んだ過去によって、長い間遠い関係にあった。生きてきた環境もまったく異なる。それでも、今回の沖繩で開催された「ジャーナリストを指す日韓学生フォーラム」では、言葉の壁という問題があったにもかかわらず、私たちはたくさん話をした。平和を考えるジャーナリスト志望という共通点を土台に、互いを理解しようと努力した。

日本軍「慰安婦」問題、沖繩と米軍基地問題などの社会問題は「他人事」と考えられがちだ。関心を持ち続けなければ、なかなか分かりづらい。韓国にも多様な社会問題があり、それによる対立が長い間存在した。ほとんどの問題は「他人事」や「国家レベルの出

ぎつしり結ばれた折り鶴が風に揺れる。日本では、追悼と祈りが必要な場所には必ずと言ってよほど折り鶴がある。韓国には、「1000羽の折り鶴を折りながら願いを唱えろ」という俗説がある。「1人の10歩より10人の1歩の方に価値がある」という言葉もある。国際舞台で著名人が平和について演説するのもよい。しかし、普通の人々が集まって「平和」を願うことの方がより価値があるかもしれ

事」のように見える。しかし、そこで留まっていたら、その問題が「個人」の問題ではなく、「我々」の問題になった時、ようやくその問題は解決できる。

平和祈念資料館で思わず足を止めた資料があった。沖繩戦争当時の状況が描かれた地図だ。朝鮮半島と日本列島が同じ色で塗られ、「日本領」と表記されていた。その前に佇み、「日本領」と繰り返して見えた。

韓国で歴史を学びながら、日本帝国主義が朝鮮半島を支配していた当時、韓国を日本領と表記したものを何度見ただろうか。今回のフォーラムの過程で日本人の友人が語った言葉が頭の中をぐるぐる回る。「韓国人はなぜ歴史にそんなに敏感に反応するの? どうせ

が、それはまさに「単純な力の論理」だった。米国は沖繩戦争で日本を、日本は植民地時代に朝鮮半島を支配しようとした。私たちが訪ねた平和祈念資料館や戦跡には、加害国米国、被害国日本と関連した胸の痛む資料が多く展示されていた。しかし、韓国人として沖繩戦の痕跡を追跡しようとする話は少し違ってくる。「当時、日本に強制的に連れてこられた韓国人も死ぬしかなかった」。そんなことを感じる外国人はどれほどいるだろうか。記念館で展示された資料を見る間、ずっとそのことを考えていた。

原文は韓国語。翻訳／文聖姫(編集部)
李受陳、高瑜晶、吳明真、いずれも韓国カトリック大学校在学